

---

# さあ人生を楽しもう

たんそくレトリバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さあ人生を楽しもう

### 【Nコード】

N4287Z

### 【作者名】

たんそくレトリバー

### 【あらすじ】

平和で無害に生活していた男が気がついたら異世界に、  
だけど気にすることもなく異世界で平和に生きていく話。（本人談）

だが異世界はその常識を持たない男の非常識な行動が原因で人間、  
魔族問わず巻き込まれていく。

自重？なにそれおいしいの？を合言葉に好き勝手書きます

ギャグやらバトルやら悪知恵やらいろいろ詰め込むつもりですが、  
なにぶん初投稿なのでいろいろ不手際があると思います。それでも  
良いという方はどうぞご覧ください

## 第一話 千本ノックと閃光魔術

なんかいきなり目の前が真っ白になった。

何だよ誰だよいきなり俺の目の前で閃光手榴弾破裂させた奴、

スタングレネード

こんないたいけな一般人に非常識なもん使っんじゃねえよ

ちよつと豪華客船に潜入して乗組員簞巻きにして海に放り投げたり  
半殺しに

スーキング

したくらいで大げさすぎだろーが、もうちよつと常識ってもんを考  
えろよ。

やった奴出てこいよ千本ノック（守備位置バッテリーとの距離3M以  
内）で根性

叩き直してやるからよ、

とかなんとか考えてたらようやく視界が回復してきた。

さあて、どんな仕返しがいいかなあ。

少しずつ視界が開けていく中、俺はそこでふと視覚以外の五感で違  
和感を感じた。

おかしい

さっきまでしていた潮の香り、波の音が消えている

肌に感じていた風もいきなりやんだ

自分は間違いなく船の船首甲板にいたしここは海のと真ん中だ

突然船の揺れが止まるはずもない。

どう考えてもおかしい

有り得ない事態に本能が警鐘を鳴らし即座に行動できるよう体勢を整え

周囲への警戒レベルを最大まで引き上げつつ視力が回復するのを待った。

そして視覚が完全に回復してその違和感は決定的になった。

「は？」

隣から間抜けな男の声が聞こえた

なぜかそこは船の上ではなく石造りの大きな部屋の中央だった。

「な、なんだ、何が起きたんだ！」

隣の男が騒ぎ出す

身なりからして高校生くらいか

ぱっと見かなり整った顔をしている

身長は170位、スマートって言葉が良く似合う体格をしている

少なくとも女に困ってることはないな

きつととぼけた顔しながら何人も泣かせてきたんだろう

こいつがさっきの閃光手榴弾スタングレネードの犯人だろうか

おそらくこいつが犯人だろう

いや、こいつが犯人に違いない

てゆうか犯人ということにしよう

よし、あとで閃光つながりシャイニンググワイザードで閃光魔術をかましてやろう

ついでに額に油性ペンで巨乳と書くことも決定だな

べ、べつに私情で犯人で決め付けてるわけじゃないんだからね!!!

まあそれはいいとして（後でやるから）

問題はこいつらか

そう思いつつ部屋の壁伝いにぐるりとこちらを囲んでいる集団に目をやった

なぜか全員中世にタイムスリップしたような格好をしている

全身を覆う鎧を着て槍や剣を持つ兵士達

絵画から抜け出てきたような貴族風の男女共

きわめつけは

「ようこそ勇者様」

高そうなティアラを頭に付け金持ちがでかいパーティでしか着そうのない

ドレスを着たいかにもな王女サマっぽい女だった。

## 第二話 何事も礼儀は大切です

「は、はい？」

隣の男がわけが分からないという顔をしながら王女サマっぽい格好をした女に顔を向ける

「初めまして勇者様、私の名前はエクレール、エクレール・フォン・バイムと申します。ここ」

バイム王国の第一王女でございます」

「ぼ、ぼくは鷺沼英人さぎぬまひでしといいます・・・て、ばいむ？聞いたことない国

ですけどそれってどこにある王国なんですか？」

「ご存知ないのも仕方ありません、ここはあなた方が居た世界とまったく違う世界で・・・」

「え、ええー！ー！それはいったいどういふこと・・・」

「それは・・・」

横でやってる会話に適当に耳を傾けつつ、俺は周囲の状況を確認していた

周囲の人間の数はざっと見4〜50人はいるがこちらとは距離をとっている。

近づいてきたのは王女サマのみか、

地面には魔方阵っぽい模様があり俺と鷺沼とかいう男はその中心にいた

「つまりこの世界には魔神を頂点とした魔族っていうのが人間の生活を脅かしている？」

「はい、そしてその魔族の脅威から我々を救ってくださる勇者様があなた方なのです、

どうか力無き私たちの希望の光となってくださいませ」

「い、いきなりそんなこと言われても」

大抵こういう奴は結局引き受けるんだよな、んで魔王だか魔神だかを殺ったあと

「姫……」「勇者様……」とかいつてくっついてハッピーエンドって流れが王道だよな

けどまあ現実はその甘くなさそうだと

でもいまの俺はそんなことどうでもいいくらいの重要な問題が発生し、人知れず頭を抱えていた。

腹減った

そついあ今日ろくに喰ってねえや

せっかく豪華客船に乗ったのにせいぜい見たのはパイナップル（手榴弾）くらいか

まあフルーツは食いたくない気分だったから投げてくれた人の口の中に

丁重にお返ししたけどな（トルネード投法で）

なんかえらいさわいでたなあ、そんなに俺の丁寧な対応に感動したんだろうか

感動しすぎて爆発してたしな、感動は爆発だ！っていう人なんだろう  
礼儀は人間関係を円滑にする重要な要素だからな、俺ほどの人間だと

学ばなくとも自然とできてしまうのだよ

しばらく二人の会話が続けていたが

「わかりました、できるかぎりやってみます！」

という勇者サマの一言で場に歓声が広がった。

「おお」

「なんと凛々しい」

「これで世界は救われる！」

てな具合にね

ふむ、んじゃまあ場もいい頃合だしそろそろこいつらの本性暴く  
しますかね

「ひとつ聞きたいんだが」

今まで沈黙を続けてきた俺の言葉に少し驚いた表情をしながら鷺沼  
とかいうのと王女が

こちらに視線を向けた

ていつかこいつら俺の存在に気づいてたのか

無視されてるからまったたく気づかれてないのかと思ってたぜ

「俺たちを元の世界に戻せるのか？」

俺の一言で場が静まる、そして一部の人間から俺へと向けられる強い一つの感情

あ、感じる！ワタシ、感じちゃってる！！（殺気を）

こ、こんなにたくさんの人から感じちゃうなんて！！（殺気を）

く、くやしい！でも感じちゃう！！（殺気を）      ビクンビクン

王女はさっきとは違ってかわってなかなか言葉を発しない

「そ、それ「もちろんですとも!」」

王女の言葉を遮る馬鹿でかい声の主はそういつつこちらに近づいてきた

「あなた方をもと居た世界に帰すこと、これは当然できまする、

ですがそれにはしばらくの月日が必要でございます、

異世界の扉を開けるには色々準備が必要ですので、

申し遅れました、私はここバウム王国の大臣をしているものでございます」

そう言って深く頭を下げてきたメタボ爺さん、（名前名乗ってたけど忘れた）

「もし勇者方様にご帰還を希望されるのであれば、残念ではございますが元の世界へ

お送りいたします、ただ先程も申しましたように異界への扉を開けるのには

有る程度の時間が必要でございますのでその間は王国で貴賓待遇で  
応対

させていただきます」

「へー」

つまり帰す方法はない、そして断るなら還す（土に）ってことですね、分かります

さあてどうしようかな

### 第三話 イケメンの顔は潰す為にある

というわけで、やってきました玉座の間

目の前にはロープレでよく見る玉座に座っている王冠かぶったひげもじゃジジイ

そして部屋にはさっきの取り巻き共もきている

ちなみにさっきの姫さんはジジイの横にいる

「おぬしらが召喚された勇者か」

された、じゃなくてためーらがしたんだろうが

なんて本音は当然言うわけも無くここでも俺は黙っていた

「はい、私は鷺沼英人といいます、この世界の平和のためできつる限りのことを

するつもりです」

俺が黙っている理由は二つ

ひとつはこつという堅苦しい空気が嫌いだから

こついうところはイケメン君に喋ってもらってたほづが絵になるだろつ

「うむ、よくぞ言ってくれた！おぬしの活躍に大いに期待しているぞ」

そしてもうひとつは俺がシャイボーイだからだ

こんなたくさん人が居る中でなんか話すなんてめんどk・・・

シャイな人間にできるわけないじゃないか、初対面の人には恥ずかしさの余り

もれなく目潰し、金的、延髄蹴りをしてしまう俺には難易度が高すぎるのだよ。

というわけで王様へのお披露目もすんだのでさっさと部屋を出

「では10日後に早速魔神の住む魔神城におぬしらをつれていくので準備しておくように」

ようとして足を止めた。

ん、んん？今このジジイなんつった？10日ゴ？マジンノスムシロ？

「え、ええ！いきなりですか！？」

イケメン君が驚く、無理も無いな、ロープで言うなれば剣すら持つてないレベル1の状態で

ラスボスに挑んで来いと言われたようなもんだしな

「む？もしやまだ説明しておらんかったか？」

「初めて聞きましたよ！！！」

「そうかそれはすまなかった、なに、心配はいらぬ、何も魔神を倒してこいといっているわけではない」

長々とジジイの説明が続いたのでまとめると以下のようになる

・召喚された人間が魔神城に漂っている魔力に触れるとなにやら強い力が目覚めるらしい

・目覚める力は人によって違うのでどんな力かは目覚めてみないと分からない

・この世界の人間が魔神城の魔力に触れてもなにも起きない

・魔神城には特殊な魔法具を使って俺たちだけを瞬間移動させるらしい

・一定の時間（説明からして約1時間程度だと思う）が経つと自動的にこちらに帰ってこれるらしい

・城にいつでも魔族と戦ったりする必要はまったくない

・魔族に遭遇しても召喚されたばかりの人間には不思議な力が働いており、あちらは手出し

できないらしい。ただしこちらがあちらに手を出すとその効果は即失われる。召喚されてから

約15日経っても効果は失われる

・すぐにあちらにいかないのは、まずこの世界の空気を体に馴染ませてからでないにあちら

の魔力に触れた瞬間、体がやられてしまうかららしい

つまり行って特に何もせず帰って来いって事らしい

説明が終わり、今度こそ部屋を出た

イケメン君は姫さんに呼び止められなにやら話していた、おそらくすでに堕ちているんだろう

ああいうのは何もせずとも女を墮とすからな、天然のジゴロって奴だな、恋愛ゲームの主人公

によくあるタイプ、隙を見て今度顔を潰してやるう。

その後なんか個室に案内されたのでそこで用意した食事を使った後、俺は考えていた、

んー、なんか今日一日色々あったけどどうしようかなあ、

丁度あつちの世界は色々めんどくさくなってきてたんだよなあ

この世界魔法やら何やら色々おもしろそうだよなあ

もとの世界には多少心残りはあるけど、本当に少しだけだしなあ

具体的には来週の週間少年本読んでおきたかったとかアレやそれ系

の本処分しておきたかった

とか俺の属性が分かってしまっあんなDVDを処分しておきたかったか

まあ帰る方法も探せばあるだろうけどここで生きていくのも悪くなさそうだし

一丁がんばってみよう！

さて、取りあえずは10日後に魔神城に行くんだけど・・・

せっかくこんな序盤にラスボスの城にいけるんだし、ただ行くだけじゃあつまんないよなあ？

よし、挨拶代わりに“お掃除”をしてあげるとするか

そうと決まれば明日からさっそく行動開始だな、10日の間に色々準備しておくとしてよう

うーん、俺ってなんてやさしいんだろう

聖人君子も俺には及ばないだろうな

そのときその部屋に誰かがいたら、間違いなく背筋が凍り、恐怖で心臓が止まっていただろう。

蛇に睨まれた蛙のようなかわいいものではなく、

それこそ魔神に睨まれた何の力も無い子供のように

それほどに彼の表情は

冷酷、冷血、冷徹、残忍、残酷、残虐、極悪、非道、すべてを孕んだ

満面の笑みをしていた

「さあ人生を楽しもう」

#### 第四話 世界は矛盾とシンデレラでできている

とりえずあす次の日、来るべき“お掃除”のために色々と準備するため町にやってきました

そうそう、めんどくさくて（書くのが）色々説明してないことがかなりあるので（ ）の文字はなんだろうね、目の錯覚かな？）

今のうちにしておこう

まずこの世界の名前はウルジアというらしい

金の単位はG「ゴールド」

文化はまさにロープレな中世的かんじ

武器や防具が普通に売られており、ごつい鎧着た人がガチャガチャ音を立てながら歩いていたり

弓持った狩人みたいな人もいる。

市場もあり少なくともこの町は活気があるようだ。

おぼはんが大きな声を出しながら売り物の果物っぱいものを行きかう人にアピールしてたり、道具屋っぱい人が自分の薬っぱいのを

客に説明してたり、あっちこっちでワイワイガヤガヤと喧騒が聞こえる。

さて、ではこの世界の肝となる部分を説明しよう。

この世界の生物はワーク（以下WK）と呼ばれる潜在的な職業を持っているらしく、

俗に言う「ジョブ」とはまったく別のことを指している、

この世界での「ジョブ」とは、その人が就いている職業の事を指すこと

に対しWKはその人が持つ潜在能力がどんなものを分かりやすく職業で表したものの、という感じ

例を挙げてみよう

商売大好きで商人になったがその人のWKは戦士系だった

その場合、その人は戦士系の才能である力や体力に大きな可能性を持ち、逆に

商人として必要な計算や話術等の才能はあまり見込めないということだ

つまり商人としては大成しにくいということである

ただそれを分かっているながらこの人のようにWKとジョブがちぐはぐな人が

けっこういるのだ。

まあそれには理由があるのだが後で説明する。

話がずれたがこのWK、結構深くできているらしい  
まずWKはランク制になっているらしく

C B A 特A S 特Sというのを基本としているのだが

Cが一般的な職でAから上のWKはめったにいない、  
ということ以外未知数らしい。

何しろ才能というものはそれこそ千差万別、人の数だけ存在するのだ。

現在確認できているWKだけでも軽く3万は超えているが、  
(そのうちのA以上で確認できているのは1割満たない) 未確認WKの  
情報もかなりあるようで  
総数は全く把握できないらしい。

しかも同じWKを持っている人でも成長や特徴がまったく違ったり  
もする

さっきの戦士を元にロープレ風に例を挙げると

WKが同じ戦士系でジョブも同じレベル20のA、Bがいるとして、  
Aは力が高いが技術が未熟、  
Bは力は弱い、技術に長けておりAの使えない技も使える

と、こんな風にまったく違うタイプの戦士がいたりする。

24

つまりWKは文字どおり人の数だけ存在し、且つ同じだったとしても  
一人として同じ能力、成長ではないのであくまで目安程度にして  
おくとよい、ということになる。但し特定のWKやジョブでしか  
覚えられない技や魔法もある

さて、では次にそれだけ大量にあるのにどうやってランク分けをして  
いるのか?ということになる

答えは簡単で、道具、ていうか石を使えば良いらしい

「ハロー石」と呼ばれるもので、結構一般的なものらしく  
これを両手で握り締め、約2分待つと石の色が変化するので、  
その色で判断できるらしい。

未確認のものもこれでランクの判別が可能。

C 白 B 黒 A 銅 特A 銀 S 金 特S 虹

とこんな感じらしいのだが例外として、

このランクに入らない特殊なWKが

2種類存在する。

1つは犯罪者、これは犯罪を犯した人に追加されるWKで

これを所持している間は、人間としては扱われず、法により守られることも無い、

且つ犯した罪によって大小の賞金がかけられる。

これを消去するには自身にかけられた賞金の倍額を専用の施設に納めなければならない。尚、これを所持している間ハロー石は

その人の元々所持しているWKに関係なく必ず灰色になる

もう1つは固有WK、これは極めて稀なWKと認められたものである種族しか持たない、特殊な育ち方をした等、普通の方法では付くことがないWKである。このWKはものによっては特Sを超えるもの

もあるらしい。又、このWKの場合ハロー石は上記以外の様々な色に変化する。

方法、といったのはWKはその人の鍛錬や思想、

生き方によって後天的に変わることもあるのである

CからBに上がったたりもすれば、逆に下がったりもする

同ランクの全く違うWKになったりもするらしく、

その際WKの名称も当然変化する。

魔法使い 賢者 戦士 商人のように

つまり最初の例にしたW Kが戦士系の商人も後にW Kが商人系に変化する可能性がある、ということである。例の商人のような人はこれを期待しているのだ、もちろんそうでない物好きもいるだろうけど

もつとも、全く違うW Kになるには、ランクを上げるのと同じくらいの時間と鍛錬が必要になるらしい。

ただ、ランクの変化にも個人差があるので、あつけなくランクが上がったり変化したりもすれば、どれだけ鍛錬しても  
現状のままという人もいる。

ランクが上がると潜在能力の限界値と能力の上昇率も上がるが、能力自体が上昇するわけではないので、必ずしも高ランク所持者が低ランク所持者より優秀とは限らない。

そうそう、俺らが召喚された理由もこのW Kにあるらしい。召喚された人間は例外なくW Kが初期から高位らしく、且つ、ランクアップも極めて早いらしい。だが、以外なことに今までに「勇者」というW Kを持った人間はいないようで、戦士系や魔法使い系の上位系統がほとんどらしく、そのW Kに合わせて仲間やジョブを決めていたそう  
うだ。

ちなみに「アンサー」という魔法を使えば、その人のW Kやジョブが分かるらしい。

ただ、召喚された人間は力を目覚めさせないとW Kとそのランクが分からないとのこと、魔神城に行くのはそのためらしい。

そしてジョブを変更する方法はW Kよりも簡単で、一般的にはレキ符という道具を使う。

使い方はなりたいたいジョブを書き、ハロー石と同じく両手で2分包む、すると裏にそのジョブなるための条件が書かれるのでその条件を満たせばいいが、条件は人によって全く違う。

ただしレキ符を使ってもなれないジョブもある、その場合は、何か別の条件を満たす必要がある。

(なれないジョブを書いた場合レキ符には何も書かれない。)  
ジョブのほうにも固有のものがあり、ある種族にしかなれないものや、

大きな活躍をしてみたたりする、だがW Kほど総数は多くない。

(ジョブ自体の総数がW Kより遥かに下回るのが理由)

ジョブのランクは

一般職 上級職 最上級職 例外固有職

となっており上にいくほど能力に高い補正がかかること  
ちなみに一般職からいきなり最上級職にクラスチェンジ  
することは不可能。

あと、自分が装備できる武具はジョブによって決まっている。

戦士系のW Kを持っていても、ジョブが魔法使い系なら

魔法使いの装備できるものしか身につけられない、

ということである。

長々と説明してしまったがこれを聞いた大抵の奴はこういうはずだ。

なるほど、わからん！！と

心配するな、俺もわからん。

まあそんなのがあると思ってくれてればいい。

長すぎて何言ってるか分からなくなったりしたしな。

矛盾とかあっても、それは俺が間違えて覚えたことだろうから気にしないように。

なぜなら世界は矛盾で満ちているのだから。

と、締めたところで説明はここまでにしとこう。

あとは追々していくので楽しみにしておくように。

さあ買い物買い物

べ、別にめんどくさくて投げたわけじゃないんだからね！

## 第五話 誓いは犠牲を払ってでも守るべし

なーんか面白いもん売ってないかなあ、  
とうろついた結果、なかなかいいものが売っていた。

結構一般的に出回っている物のようで、ジジイ王から  
もらった金額で十分買えるものだった。

そしてあつという間に10日たち、今俺は魔神城にいる。  
使われてない古い空き部屋に飛ばされたらしく魔族側には気づかれ  
ていない。

隣には勇者サマも一緒にいる。  
そついあ勇者サマは俺よりかなり多く金を王サマから貰っていたら  
しく

さらに国に伝わる由緒正しい剣や鎧などもいただいたらしい。  
おかげで今の俺らはパツと見英雄とただの一般人に見える。  
俺は武器も防具もつけてないからな。

ただまあ、なぜかこの勇者サマ、今大の字になって寝てるんだよね。  
まったくこんなところで寝るなんて信じられないな。  
なんで寝てるのか俺には分からんがみんななら分かるかも知れない、  
さつき起きたことを思い出してみよ。

こちらに飛ぶ前から話してみよう。

「ヒデト様、どうかくれぐれも無茶はなさいませんように。」

「大丈夫ですよ、時間が来るまで大人しくしていますから」

と、両手を掴みながら見詰め合う姫とイケメン、共に顔が良いだけに絵になっている。現在地は最初に召喚された石造りの部屋（儀式の間というらしい）の魔方陣の上にいる

「ではお二人とも、これに触れてください」と姫の後ろに控えていたローブを着た魔術師のような奴が差し出してきたのは、サッカーボールくらいの水晶球だった。水晶の中心にはなにやら城のようなものがおぼろげながら見える。名残惜しそうにイケメンから離れる姫、そして俺とイケメンが水晶に手を置い

たと思つた瞬間に別の場所にいた。石造りなのは変わらないが部屋が小さくなっておりなんか埃っぽい、部屋の隅には蜘蛛の巣が張つてある。何より充滿している空気が明らかに先程と違う。空気に体全体が圧迫されている感じ、確かにこれは慣らしておかないときついだろうなあ、と周りを見ながら思っていた。

「うん、ここなら大丈夫そうだ、時間が来るまでここに隠れているのが良いと思うんだけどどうk」

と言いながらこちらに顔と体を向けてくるイケメン君の右膝の上には

「え?」

なぜか俺の左足が乗っついていて、

そのまま俺は階段を駆け上がるかのように右膝を体ごと地面から蹴り上げた、  
すると右膝は吸い込まれるように

「ぐあっ！」

イケメン君の顔面にHITした。

見ててくれたか、世のモテない男子諸君、俺はやったぞ、君たちの怨敵を一人片付けたんだ。  
これで世界は一步平和に近づいたんだ！

俺は一度した誓いは守るのだ、例えそれがどれほど理不尽であろうとも！！

自分の浮いた体が地面に着地するまで俺は満足感に浸っていた。

だがそこで俺は自分の大きな過ちに気づいた

「ぐうっ、なんということだ、油性ペンが無い……！」

これでは誓いを果たせない、額に消えない傷（巨乳）を残すことができない！

俺はがつくりと膝を落とし、両手を地面につけた。

みんなすまない、俺の不手際でこんなことになってしまった。何でもっとしつかりと準備を整えておかなかつたんだ！

俺は自分を許せなかつた、千載一遇のチャンスを生かせなかつたのだ。

「だが、俺はあきらめない！これでどうだ！」

取りあえずそこらへんに落ちてた棒を鼻に突っ込んでおいた。

そして話は冒頭に戻る

どうかな、わかつたかな？

分かつた君はおそらくIQ300はあるはずだ。

おそらくこれはフェルマーの最終定理クラスの難問だからな。まあ俺はフェルマーの方は分かるがこれは全く分からない。

仕方ない、ここは安全そうだしそもそも魔族は手だしできないんだし、

ここで寝てても大丈夫だろう。

俺はお掃除をしなければいけないので行くとする。

ゆっくり扉を開けたが外には誰もいなかったので辺りの気配を伺いながら

部屋を出た。

どうやらここは地下のようだな、辺りは薄暗く、

すぐ近くに階段がありそこから少し光が指している。

さて、んじゃまあ行くとするかな

俺の潜入技術スニッキングと買ってきたあれらを使い

見事にお掃除を完遂して見せる！

「うむ、異常なし」

と、魔族Aは今日も自分の持ち場の見回りしていた

彼は魔神城の中の魔族で一番下の魔族を統括している立場にある。

本来なら割り当てられた部屋でのんびりできる立場なのだが

生来の生真面目な性格のため、自身も持ち場を持ち、見回りをして  
いるのである。

だが悲しいことに、彼はその性格ゆえにこれから起こる大事件の一端を

担い手になってしまったのである。

## 第六話 魔神城（笑）

その日も魔族Aは異常がないことを確認しつつ、いつもどおり見回りをしていた。

すると少し離れた所にある曲がり角から、見ない顔の下級魔族の姿が見えた。

こちらから声を掛けようとしたとき、向こうがこちらに気づいて、慌てた様に小走りしながら近づいてきてこう言った。

「はぁ・・・はぁ・・・は、初めまして、わ、私。ついせ、先日、城の警備に

は、配属されたもので、ふう・・・はぁ・・・、今色んな方々にあ、挨拶に伺って

いる所です・・・ふう・・・ふう」

ふむ、新入りか、私は城にいる下級魔族による警備の指揮を執る立場ではあるが、下級魔族を自分で選んで城に配属させることはできない。当然だ、ここは魔神の住む城、すべての決定権は魔神様にある。ということはこの下級魔族も魔神様の御目に留まり、城の警備という誉れ高い役目を賜ったのだろう。

だがどうやら走り回っていたらしく、息もたえだえに話をしており、肩も上下させている。相当あちこちの挨拶回りをしたんだろう。

「そうか、私はお前を指揮する立場にあたるものだ、これからは私の指示に従うように・・・しかし見回りをする前からその様子では心もとない、少し休憩してくるといい」

かなり疲れている様子だったのでAはそのように声をかけた、しかしその魔族は、

「い、いえ、それよりも重大なほ、報告が・・・はあ、ふう」

と、言葉を返した後、その魔族は呼吸を整え、息切れを落ち着かせはじめた。

Aもその方が報告とやらを聞きやすいと思い、落ち着くのを待った。そしてようやく落ち着いたので魔族はゆっくりと話し始めた。

「先程も申したとおり、私、先日魔神城に配属されたばかりで、今の今まで城の方々にご挨拶をしていたのでございます、すると先ほど　　を守護しているあの御方・・・えーっと」

「ギマルツ様か？」

「あ、はい！そのギマルツ様をお見かけしたのですが・・・」

ギマルツ様が。

数々の人間の強者、勇者を何人も屠り、最強の魔族の一人に数えられている。

魔神様の信頼も厚く、直々に「勇者殺し」のWKを与えられた御方。その腕を振れば海が割れ、その足を動かせば大地が震える。

最強レベルの魔法をいくつも使え、さらにその身には最高の武具を着けている。

まさに魔族の勇者と呼ぶにふさわしい御方、ゆえに彼の御方はあの場所の守護を任されているのだ。

そのような御方にお会いできたのだ、この新入りの感動はひとしおのものだろうと私は思っていた、だが新入りはそこで

表情を曇らし、その後の言葉を中々口にしなかった。

「どうした、何かあったのか？」

私が尋ねると新入りは顔を俯けながら言った。

「いえ、こんな話を私のようなものがしても信じていただけるかどうか・・・」

「ふむ、取りあえず話してみるがいい、信じる信じないはともかく、話を聞かなければ始まらない。それにお前も誰かにそのことを

報告するために走り回っていたんだろう？」

「わ、分かりました、すべてお話致します。」

私があちこちの方々に挨拶をしながら城を歩いていると、城の一角にある  
曲がり角に差し掛かったのですが、そこでふと顔を通路の先に向けると

ギマルツ様のお姿を見かけました。

私のようなものでも知っているあの噂に名高い御方に会えるなんて、と感動に打ち震え、ぜひ挨拶をと思いつこうとしたのですが、なにやらどなたかと話をしていらしたのでそれが終わってからにし

よう

「と思い、邪魔にならぬよう曲がり角に姿を隠して待っておりまして、すると会話の内容が漏れ聞こえてきたのでございますがその内容が、  
「ほう、召喚された人間か、ということはここには力を覚醒させるために  
来た、ということか」

「来たってゆうか飛ばされたって感じだな、気づいたらなんか知らん部屋に  
居たんだよ、ってかやっぱ俺が来た理由知ってたんだな」

「くくく、今まで何人の人間が召喚されここに来たと思っております。  
しかしWKやジョブも持たぬ人間が力に守られているとはいえ  
このわしと口が利けるとはな、普通なら心臓が止まっておるぞ」

「あいにく俺の心臓にはラッコ並に毛が生えてるんでね、  
ちなみにラッコの体毛の数は世界一位だ」

「・・・意味は分らんが、貴様が豪胆な人間だということはわかる、  
してなにゆえ城内をうるついでにおる、時間が経つまで隠れていれば  
よかるう」

「なに、丁度あんたみたいな奴を探してたんだよ」

「・・・ほう?」

そこで私はさすがに我慢できず顔だけを出して話し声のする通路を

見ました、  
すると

パチン

という音がしたと思うとギマルツ様の体が眩く光りだしたのです！

「ぐうぐうううおおおおお！、なんだ、これは！！力が、  
力が抜けていく！！！」

「シルブレっていうものらしくてね、魔族の力を  
弱めるものらしいよ」

「シルブレ・・・だと、バカな！！シルブレがこれほどの力を  
持っているはずがない！ぬううう・・・何をした、人間！！！」

シルブレとは特殊な鉱石を加工し、それに聖職者が祈りを捧げて完  
成する

指先サイズの球体でそれを使うと魔族の力がしばらく低下する、と  
いうものです、がギマルツ様のような最上級格の魔族には効果が無  
い筈、

なのに！ギマルツ様は片膝を着き、片手で胸を掻き篋り、もう片方

の手で  
頭を抱え、とても尋常な御様子ではありませんでした！

「こいつは普通のと違ってね、

本当にとびつきり強力な魔族にしか効果がないっていう変わり物らしい、

シルブレクエスタとか、店主はご大層な名前付けてたけど、用は欠陥品で奴だな、

普通の魔族相手にはただの石ころだしな。

値段も安かったし・・・だがまあ、物は使いようだろ？」

そう言うと、私が目にしたその人間は

とても人とは思えないような残酷な、とても残酷な、

満面の笑みをしていました

第六話 魔神城（笑）（後書き）

六話からしばらくギャグが少なくなります、  
ギャグばっか書いてたからなんか落ち着かない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4287z/>

---

さあ人生を楽しもう

2011年12月21日00時46分発行